

## ポルトガルの大衆紙“CIVILIZAÇÃO”が1930年1月号で伝えたモラエスの墓、告別式、彼の部屋に関する記事について

佐藤征弥\*・岡村多希子\*\*・境泉洋\*・石川榮作\*・宮崎隆義\*

\*徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

E-mail: satoh.masaya@tokushima-u.ac.jp

\*\*東京外国語大学名誉教授

## Moraes's tomb, funeral, and rooms reported in the January 1930 issue of the Portuguese popular magazine “CIVILIZAÇÃO”

Masaya Satoh\*, Takiko Okamura\*\*, Motohiro Sakai\*, Eisaku Ishikawa\*,  
Takayoshi Miyazaki\*

\*Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, Tokushima 770-8502, Japan.

\*\*professor emerita of Tokyo University of Foreign Studies

### Abstract

Portuguese popular magazine “CIVILIZAÇÃO” published an article of the tomb, funeral, and rooms of Wenceslau de Moraes in the January 1930 issue after about half a year when he died at his house in Tokushima on July 1, 1929. This article has not been introduced to Japan. Even though it is short, we can understand high evaluation of him in Portugal. Furthermore, it contains seven photos; four of them have not been published in any Japanese documents. These photos, three are of his rooms and one is taken at the funeral, tell us Moraes's life vividly with new findings about his belongings and acquaintanceship.

**Keywords :** “CIVILIZAÇÃO”, Moraes's funeral, Moraes's house, Moraes's tomb, Wenceslau de Moraes

### 1. はじめに

軍人から外交官へ転身し、さらに日本に住み続けて数多くの著作を残したポルトガル人ヴェンセスラウ・デ・モラエスは、1929年（昭和4）7月1日、徳島市伊賀町の自宅で亡くなっているところを発見された。享年75歳であった。花野富蔵著『日本人モラエス』<sup>1)</sup>によれば、毎朝早起きするモラエスの姿が見えないことを不審に思った隣人たちが、そのことを家主である中山孫七に伝え、警察立ち会いのもとで住居に入ったところ、モラエスの遺体を発見した。遺体は翌日の7月2日に火葬され、翌7月3日の午後3時半より安住寺にて告別式が営まれた。遺灰は彼の遺言通りに齋藤コハルの墓に収められた。

モラエスが亡くなっておよそ半年後、ポルトガルの月刊大衆誌“CIVILIZAÇÃO”が彼の

ポルトガルの大衆紙“CIVILIZAÇÃO”が1930年1月号で伝えたモラエスの墓、告別式、彼の部屋に関する記事について



図1 “CIVILIZAÇÃO”1930年1月号とモラエスの記事

a) 1930年上半期の6冊を1巻に製本したもの。b) 1月号の表紙、c) モラエスに関する記事が載っている113頁、d) 記事の残りの114-115頁。

墓、葬儀、部屋の様子を紹介する記事を書いた。この記事は、日本ではこれまで紹介されたことはない。短い記事ではあるが、ポルトガルの大衆雑誌が彼の死をどのように伝えているか分かる興味深い資料である。さらに、この記事に掲載されている7枚の写真は、日本の資料では見ることのなかったものや、よ

り鮮明に映っているものが含まれており、モラエスの生活を窺い知ることのできる貴重な資料である。本稿は、記事を紹介しつつ、文章や写真から読み取れる情報を整理し、モラエスに関する新たな知見や今後明らかにすべき点について述べていくことにする。

## 2. 記事の内容

## 2-1. 資料について

“CIVILIZAÇÃO”はポルトガルのポルトで発行された大衆月刊誌で、1928年に創刊され、1937年まで続いた<sup>2)</sup>。本稿で資料としたものは、ポルトガルの古書店より購入した。図1aの写真のように半年分の6冊を一つにまとめて製本されており、ペイズリー模様の装丁が施されている。図1bはモラエスの記事の載った1930年1月号の表紙の写真である。記事は雑誌の113-115頁に、3ページわたって掲載されている(図1c-e)。

## 2-2. 記事本文

記事の原文は、本稿の最後に載せた。記事のタイトルは“O túmulo de Wenceslau de Moraes”であり、「ヴェンセスラウ・デ・モライスの墓」という意味である。モラエスの綴りが、MoraesではなくMoraisとなっているが、これは、1911年以降ポルトガル政府はMoraesをMoraisと改めさせたためである<sup>3)</sup>。写真の説明を除いた記事の本文は、3段落150語からなる短いものである。以下に日本語訳を記す。

“CIVILIZAÇÃO”(文明)は、長年にわたり日本に居住し、日本風の習慣や伝統にすっかり従って生きてきた偉大な作家ヴェンセスラウ・デ・モライスに関する、本誌に特別に譲られた何枚かの極めて珍しい写真を、読者にお見せすることを喜ばしく思う。

写真は、「日の出の帝国」でヴェンセスラウ・デ・モライスが受けていた高い評価と尊敬を、また、徳島—ここで彼は実に庶民的に暮らした—に住む友人や隣人が彼の死をどれほど悼んだかを、よく表している。

昨年7月1日に自宅で亡くなっているのを発見されたこの偉大なポルトガル人の遺灰は、写真の1枚が示しているように、徳島の墓地で、最愛の友コハルの遺灰のかたわらに眠っている。墓石には、ポルトガル文学において、ピエール・ロチがフランス文学においてそうだったところの、この高名なポルトガル人の名前が、カタカナで縦に刻まれている。

上記の文章で興味深いことを三つ挙げておきた

い。一つは徳島で「実に庶民的に暮らした」と書かれている点である。領事の職を辞して神戸から徳島に移住した彼は、四軒長屋の一角に住み続けて、市井の人々に混じり質素な生活を送り、自身や貧しい人々の生活を作品に書き綴った。モラエス宅の近所に住んでいた人々にとって外国人がこのような所に暮らしているのは不思議なことであったが、母国ポルトガルの人々にとっても、彼がなぜこのような生活を選んだのか奇異に感じていたことが窺われる。二つ目は、コハルのことを“amigo”「友」と表現している点である。モラエスは徳島に移住した当初、コハルと同居生活を送ったが、死後明らかにされた遺言状ではコハルと一緒に墓に入りたいと希望している一方で、彼女のことを“criada”「下女」と形容している。同じ遺言状の中でおヨネのことを、“querida companheira”「愛する伴侶」と形容しているのと比べると、二人の女性に対する彼の心情はまったく違っている<sup>4)</sup>。彼の著作『おヨネとコハル』においてもコハルへの愛情は、男女のそれとは違うことを表明している<sup>5)</sup>。モラエスはおヨネの墓を徳島に建て、自らも徳島に移住して間もなく、自分が死んだらおヨネの墓に入りたいとおヨネの親族に頼んだところ、こっぴどく断られた経緯がある<sup>6)</sup>。“CIVILIZAÇÃO”の記事は、なぜ「下女」だったコハルと一緒に墓に入るのか、その説明を避けるために「友」という言葉を使ったのではないだろうか。なお、記事では“amigo”と男性形となっているが、女性形の“amiga”でなければならない。モラエスの著作『おヨネとコハル』でコハルが女性であることは周知の事実であるから、故意に男性形を使用することには意味がない。誤植かもしくは勘違いによるものであろう。三つ目は、彼の作家としての位置づけにピエール・ロチを引き合いに出していることである。モラエスとロチはともに日本に滞在して、日本のことをヨーロッパに紹介した作家であり、生没年も数年しか違わないが、作家として名を上げた時期はロチが随分早い。モラエスは自身の著作の中でロチのことを高く評価しており、モラエスの代表作の一つ『おヨネとコハル』はロチがテーマとした「死」や「憐れみ」を彼なりに昇華させた作品であると考えられる<sup>7)</sup>。ロチは41歳でアカデミー・フラ

ンスセーズの会員になったフランス文学界の大物であり、モラエスが亡くなる6年前に亡くなっている。記事でモラエスのことをポルトガルにおけるロチと評価していることは頷ける。

### 3. 写真について

#### 3-1. 墓

次に写真について紹介していく。記事の最初のページに墓の写真が載っている（図1c）。写真に付された説明文の訳は、次の通りである。

徳島の墓地にあるコハルの墓。ここに偉大な作家ヴェンセスラウ・デ・モライスの遺灰が収められた。

墓に供えられたシキミが萎れていないことや、ロウソクが燃えていること、そして墓に水をかけたばかりの様子から、墓参りの際に撮影したものであろう。撮影日は不明だが、墓石の左奥に壁に立てかけられた木杭に「ヴェンセスラウ・デ・モラエス四七日忌」と書かれていることから、死後28日目の四七日（よなのか）の追善供養の時か、それ以降に撮影されたものである。

#### 3-2. 部屋の写真

記事の134-135頁にモラエスが暮らした家の部屋の写真が4枚掲載されている。これらの写真について記事では特別な説明はなく、「ヴェンセスラウ・デ・モライスは、古い大切な品々や書籍



図2 1階の日本人形のある部屋

aは“CIVILIZAÇÃO”に掲載された写真。  
bは、壁に飾られた大きな写真と同じものと思われるポルトガルの親族の写真（徳島県立文学書道館収蔵）。

にすっかり没頭して、完璧な日本人としての生活を送った家」とだけ書かれている。後でも触れるが、134頁の2枚の写真は1階の2部屋、135頁の2枚の写真は2階の2部屋であると推測される。

135頁の左上の2階の書斎の写真は、他の資料でも見ることができるが、これ以外の3枚の部屋の写真はこれまで日本では紹介されていなかったと思われる。

以下、それぞれの写真について捕足していく。

### 日本人形ある部屋

図2aは記事の134頁の右上の写真を示す。部屋には額に入った写真がいくつも飾ってあるが、一番上の大きな写真は、図2bに示すポルトガルの親族の写真<sup>8)</sup>であろう。また、その写真の上に飾ってあるのは日本刀のように見える。遺品には日本刀があり<sup>9)</sup>、『日本人モラエス』に座敷に日本刀を架けていたと記されている<sup>10)</sup>のがこれであろう。

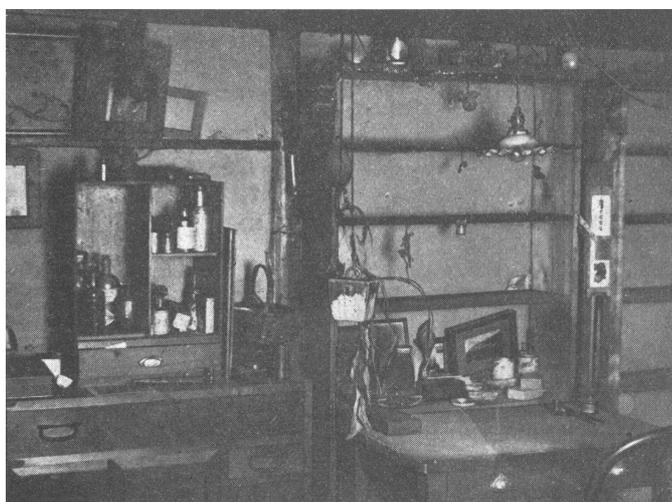


図3 1階の酒瓶のある部屋

### 酒瓶のある部屋

図3は記事の134頁の中段の写真である。タンスの上のケースの中に酒瓶が並んでいる。モラエスは亡くなる直前に酒を飲み、転倒して昏倒したことが死因であるとされているが、普段の生活において飲酒の習慣はなかった。ここに並んでいるのは、何かの記念の酒をとっておいたものでは

ないだろうか。右側には本棚が2つ並んでいるが、本が入っていない。モラエスは、983部1,756冊という膨大な書物を所有しており<sup>9)</sup>、当然この本棚にも並んでいたはずである。彼は、蔵書を徳島公園（現徳島中央公園）内にある光慶図書館に全て寄贈すると遺言状に記しており、亡くなった翌月の8/18日に光慶図書館で遺品展が開かれていることから<sup>11)</sup>、書物の寄贈はすぐに実施されたのであろう。この写真はその後撮影されたものと思われる。

写真の中央には、天井から吊るされた鉢があり、大きな葉のツル性の植物がそこから生えている。萎れて種類は分らないが、吊るされた紐を伝って天井に達し、さらに伸びているように見える。次の書斎の写真にも同じ植物が見えるが、この鉢植えから伸びて行ったものかもしれない。

### 書斎

図4は記事の135頁左上の写真であり、この部屋は2階の書斎である。この写真はモラエスの死の翌年に出された濱本房子によるモラエス追悼文集『憂曇華』<sup>12)</sup>やモラエス生誕100周年記念として1955年に作成された『モラエス案内』<sup>13)</sup>にも掲載されている。現在、徳島県立文学書道館に保存されている<sup>14)</sup>。机の上に置かれている写真は、この写真では不明だが、『日本人モラエス』によれば明治天皇の御尊影である<sup>15)</sup>。

眉山山頂にあるモラエス館では、彼の書斎を復元して展示しているが、これは写真を元に似たような品物で代用したものである。

酒瓶のある部屋と同じ植物がこの部屋にも伸びている。晩年は二階に上ることができず、二階の部屋は蜘蛛の巣だらけ、ごみだらけ、おそらく観葉の蔦類であろう得たいの知れぬ植物がボウボウと伸びていた、という濱本房子の回想がある<sup>16)</sup>。

### 標本類のある部屋

図5は記事の135頁中段の写真である。部屋に物がたくさん置かれている。棚には多数の貝の標本が並んでいるように見える。この部屋は2階であろう。彼の著書『おヨネとコハル』の中に、コハルの妹の千代子が彼の家にやってきて、2階に上がって貝類のコレクションや「山椒魚や魚の



図4 2階の書斎



図5 2階の標本類のある部屋

入ったびん」の傍で長い時間過ごしていたことが書かれている<sup>17)</sup>。また、大切に飼っていたジュウシマツを飲んだへびをアルコール漬けにして保存していたが<sup>18)</sup>、この部屋の棚の上に置かれた容

器(写真右端)は、動物が保存されたこれらの瓶かもしれない。

### 3-3. 告別式の様子

134頁と135頁の下段の2枚の写真は、1929年7月3日に、安住寺で営まれた告別式での写真である。神戸時代に一緒に暮らした福本ヨネと暮らしていたモラエスは、彼女が亡くなると、故郷の徳島に墓を建て、姉である齋藤ユキと彼女の娘コハルの世話により徳島で暮らし始めた。コハルが亡くなると、モラエスは彼女のためにまた墓を建てた。その縁で、モラエスの告別式は齋藤家の菩提寺である安住寺で営まれた。

以下にこの2枚の写真について補足する。

#### 祭壇の写真

図6aに告別式の祭壇の写真を示す。この写真は他の資料で紹介されたことはないと思われる。記事の説明文は次のように書かれている。

1929年7月3日に高名なポルトガル人の魂のために徳島で営まれた仏式葬儀が営まれた祭壇。ポルトガルの旗で覆われた死者の遺灰を含む骨壺が中央に置かれている。我々の風習とは異なり、この写真には陰気さがまったくないことは興味深い。

陰気さが無いという形容は、祭壇がいっぱいの花で飾られていることを指しているのだろう。供花には花輪と鉢に活けられた生花があり、それらには供えた者の名前が札に記されている。図6b-gに、それぞれ拡大して示したが、以下に判別できたものを記す。

#### 花輪

図6b:「葡萄牙代理公使 エーシー デイ フレイタス」

当時帰国中で出席できない公使に代わって

訪れたアンテロ・カレイロ・デ・フレイタス (Antero Carreiro de Freitas) であろう<sup>19)</sup>。

図 6c 「堺 柳原吉兵衛」

柳原吉兵衛は大阪堺の商人で、鉄砲鍛冶射的場の石碑保存にあたってモラエスの協力を仰いだことがあり、モラエスの葬儀の際には彼の代理人を送った<sup>20)</sup>。

図 6d : 「柳原〇兵衛」

上の柳原吉兵衛と関係する人物であると思われるが、詳細は不明である。

生花

図 6e : 3 人の名前のうち中央の「井内」ははっきり確認できるが、他は判読できない。井内とモラエスとの関係は不明である。

図 6f : 3 人の名前のうち中央は名字が板東、右が「新大次郎」である。ともに近所の住人である (岩本寿美氏談)。

図 6g : 3 人の名前が記されている中で、右は

「橋本富蔵」であり、長屋の隣に住んでいた。左は「福島〇〇郎」と読める。『モラエスさんを懐かしむ座談会』で、家主中山孫七が、モラエスが亡くなった朝、様子がおかしいと隣人である福島が言いに来たと証言しているのがこの人物であろう。だとすれば、札に記されたもう一人は、四軒長屋の残る一軒の住人と思われる。

上に記した名前は、関係者の子孫の証言や他の資料に登場する人物名から断定あるいは推測したものである。およそ半分が不明な名前である。文字が読み取りにくくとも、これまでにモラエス関連の資料に名前が出ている者であれば大体推定できるので、ここで不明な人物は、これまで資料に出て来なかったと思われる人々である。この写真は、モラエスの徳島での交友関係を示す新たな情報であるので、今後明らかにしていきたい。

参列者の写真

図 7a に祭壇の前に並んだ参列者の写真を示す。参列者が座っている壇には「安住寺」「モラエス氏告別式場」と記された文字が読める。この写真

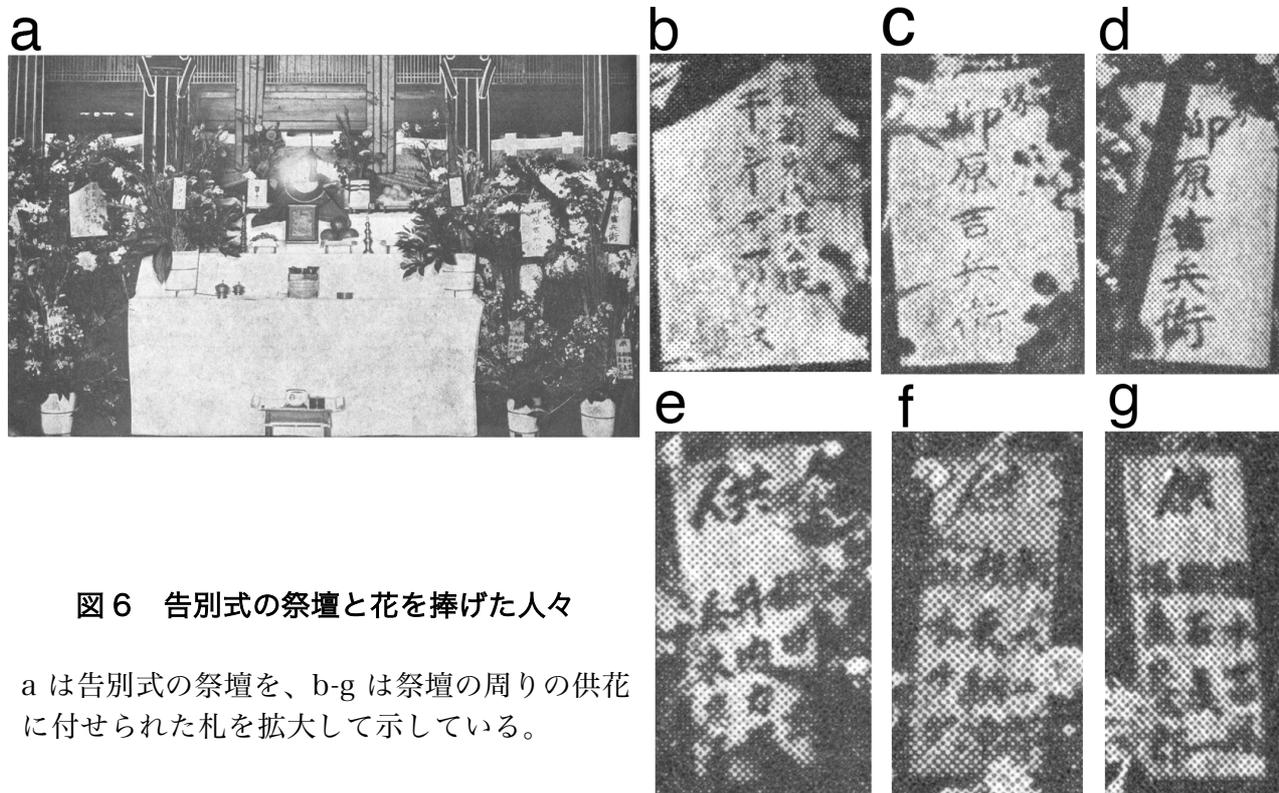


図 6 告別式の祭壇と花を捧げた人々

a は告別式の祭壇を、b-g は祭壇の周りの供花に付せられた札を拡大して示している。

ポルトガルの大衆紙“CIVILIZAÇÃO”が1930年1月号で伝えたモラエスの墓、告別式、彼の部屋に関する記事について



図7 告別式の参列者たち

a: “CIVILIZAÇÃO”の写真。b: モラエスの知人達の顔写真（「モラエスさんを懐かしむ座談會」<sup>24)</sup>「モラエス翁を偲ぶ座談會」<sup>24)</sup>『憂曇華』<sup>12)</sup>より。c: 『憂曇華』<sup>12)</sup>に載った告別式の写真。

は『憂曇華』<sup>12)</sup>や『モラエス案内』<sup>13)</sup>といった資料にも載っているが、この記事のものが最も鮮明である。記事の説明文は次のように書かれている。

『日本通信』の著者の魂のために祈る仏教儀式

の参列者たち。参列者の中には、死者の最大の友人たち数人、ポルトガル公館関係者、徳島市や軍の関係者たちがいる。

花野富蔵の『日本人モラエス』によると、告別式に参列したのは、ポルトガル代理公使フレイタス、神戸領事シルヴァ・イ・ソウザ (Francisco Xavier da Silva e Sousa)、横浜領事コスタ、県知事山下謙一、市長代理、助役、警察署長、光慶図書館長坂本章三、そして徳島の知己友人達である<sup>21)</sup>。しかし岡村多希子『モラエスの旅』では若干異なる点がある。横浜からは領事であるコスタではなく、副領事のピントが来たこと、花野は記していないが在神戸イタリア領事もかけつけたことが記されている。また、神戸領事シルヴァ・イ・ソウザと一緒に通訳の山城哲も同行したことが記されている<sup>22)</sup>。

他の資料と照らし合わせて、この写真に写っている人物の特定を試みた結果を以下にまとめる。

- ・後列真ん中あたりと前列右端の2名の人物は、制服の襟章や肩章の形状から警察官である。“CIVILIZAÇÃO”の説明に軍関係者と書いてあるのは誤りである。

- ・前列の左から3人目、中腰の人物は神戸領事シルヴァ・イ・ソウザだと思われる。その理由は、次の2点である。彼の当時の年齢は不明だが、14年前の1915年から nomeado Cônsul Honorário (名誉領事) を務めており<sup>23)</sup>、年配者であると考えられること、さらに、横顔ではあるが、『モラエス翁を偲ぶ座談會』<sup>24)</sup>での彼の写真(図7b)と頭の形や幅の広い体格が一致している。

- ・前列の左から4人目、帽子を持った人物は

代理公使フレイタスだと思われる。フレイタスの歳は、この時30代の半ばであり<sup>25)</sup>、写真に映っている外国人では最も若く見えること、そして告別式の喪主を務めており<sup>26)</sup>、前列中央に座することは自然である。

- ・前列左端の人物は岩本朋三郎である(彼の娘、寿美氏談)。岩本は近所の住人で、柳原との連絡で世話をしたエピソードが残っている<sup>27)</sup>。

- ・後列左端の人物は『モラエスさんを懐かしむ座談會』<sup>24)</sup>の写真(図7b)と顔の特徴が一致することから橋本富蔵であると思われる。

- ・後列左から2番目の人物は、『モラエスさんを懐かしむ座談會』<sup>24)</sup>の写真(図7b)と顔の特徴が一致することから多田ヨネであると思われる。多田ヨネはモラエスが通っていた米屋であり、この座談会で彼女は、モラエスは彼女にはなんでも話し、彼女もモラエスの好物である団子やちまきをモラエスの所によく持っていったと語っている。

次に告別式に出席したが、写真に映っていないことが確かめられた人物についても記しておく。

- ・当時の徳島県知事山下謙一はこの時44歳である。『別冊 徳島県歴史人物鑑』<sup>28)</sup>に顔写真が載っているが、該当するような人物はこの写真には映っていない。

- ・図書館長：光慶図書館の館長であった坂本章三は、2つの座談会や『別冊 徳島県歴史人物鑑』<sup>28)</sup>に顔写真があるが、該当するような人物はこの写真には映っていない(図7bでは『モラエスさんを懐かしむ座談會』<sup>24)</sup>の写真だけを載せている)。

なお、この告別式の写真は、『憂曇華』<sup>12)</sup>やモラエス生誕100周年記念として1955年に作成された『モラエス案内』<sup>13)</sup>にも使われているが、こ

れらにはオリジナルには映っていない2名の人物が、左上に挿入されている(図7c)。二人のうち、右側の人物は『モラエスさんを偲ぶ座談會』<sup>24)</sup>の前田正一の顔写真に似ているが断定できない。前田正一は、伊賀町2丁目方面委員を務めていて、国勢調査の際にモラエスと係わった人物で、座談会の中で火葬や通夜にも付き添ったことが証言されている。

左上に挿入された人物の他にも“CIVILIZAÇÃO”と『憂曇華』<sup>19)</sup>の写真には異なる点がある。それは『憂曇華』<sup>19)</sup>の後列右端に映っている和服の男性が“CIVILIZAÇÃO”では黒くつぶれていて、まったく分からなくなっている。故意に塗りつぶしたのか、偶然によるものかは不明である。

### 通夜、火葬について

“CIVILIZAÇÃO”の記事で紹介されているのは告別式に関してであり、その前に営まれた通夜のことには記されていない。通夜に集まった人たちは、告別式とは異なるので捕足しておく。『モラエスさんを懐かしむ座談會』<sup>24)</sup>での中山孫七の証言によれば、通夜に集まったのは、モラエスの世話をしていた齋藤ユキ、ユキの娘である立花マルエ、隣人橋本富蔵、前述の前田正一、モラエスがよく買いに行ったお菓子屋娘で、幼い頃から可愛がってもらった森(濱本)房子、南隣の家の住人であった新大次郎(献花者の一人でもある)、岩本朋三郎、死亡時の家主であり遺体の発見者の一人でもある中山孫七とその息子英一ある。

火葬は、7月2日に行なわれ、付き添ったのは、前田正一、知事代理、市長代理、柳原吉兵衛の代理、齋藤ユキ一家、その他である<sup>29)</sup>。

### 終りに

本稿は、ヴェンセスラウ・デ・モラエスが亡くなってから、およそ半年後にポルトガルで刊行された大衆紙“CIVILIZAÇÃO”の記事を紹介した。ポルトガルにおいて、モラエスがピエール・ロチに倣う偉大な作家であると大衆紙が記していることは、モラエスの評価を知ることのできる重要な情報である。また、記事には現在日

本では知られていない写真が4枚含まれており(部屋の写真3枚と告別式の祭壇の写真)、これらはモラエスの生活や交流のあった人物を知る上で非常に貴重な資料である。本稿は、これらの記事や写真について出来る限り解説を加えた。しかし、告別式の写真に映っている参列者や、献花者として名前が見える人物の中には、特定できなかった者がまだ多数残っている。徳島に移り住んでからのモラエスは、敢えて隠遁者として暮らし、親しく交流した人物はごく僅かしかいなかったというイメージを今日我々は抱いている。しかし、それは新聞等主催の談話会で話に出てきた人物しか知らないのもあって、モラエスと親しかった者はもっと多かったのかもしれないことを今回の資料は気づかせてくれる。本稿の発表を機に、新たな情報が寄せられることを待ち望みたい。

### 謝辞

モラエスの世話をした岩本朋三郎氏の娘であり、告別式の写真に関して情報をいただいた岩本寿美氏、生前のモラエスと関わりのあった人物をまとめられた郷土史家石原侑氏、ならびにモラエス研究会会員の皆様のご協力に深く感謝する。

### 註

- 1) モラエスの遺体発見から葬儀までの経過は、1935年に青年書房から刊行された花野富蔵著『日本人モラエス』の224-340頁に記されている(本稿では青空社から1995年に復刊されたものを参照した)。
- 2) コインブラ大学総合図書館が発行したポルトガルの定期刊行物情報に拠る(Biblioteca Geral da Universidade de Coimbra. Ed. 2001. “Publicações periódicas portuguesas existentes na Biblioteca Geral da Universidade de Coimbra (1927-1945)”, p144)。
- 3) 花野富蔵『日本人モラエス』12-13頁
- 4) コハルを「下女」、おヨネを「愛する伴侶」と

- 訳したのは岡村多希子『モラエスの旅』彩流社(2000)、345-350頁)に依っている(頁を記す)。花野富蔵の訳は、コハルについては同じく「下女」、おヨネについては「愛する伴侶」としている(花野富蔵訳『定本モラエス全集V』集英社(1969)、467-470頁)。
- 5) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 岡村多希子訳. 『おヨネとコハル』. 彩流社(1989). 25頁
  - 6) 『おヨネとコハル』91頁
  - 7) 佐藤征弥は日本比較文学会第49回関西大会(2013)の講演「モラエスの憐れみのまなざし — ロチ、ハーンを先達として」の中で、モラエスは、ロチの「憐れみ」のまなざしに共感し、『おヨネとコハル』はロチの『死と憐れみの書』にあたるものにしようと考えて書かれた作品だろうと指摘している。
  - 8) 徳島県立文学書道館資料番号 wm-pa002
  - 9) 1935年にモラエス翁顕彰會から発行された湯本二郎著『ウェンセスラウ・デ・モラエス翁』の22頁に蔵書と遺品が詳しく記されている。
  - 10) 『日本人モラエス』289頁
  - 11) 『モラエスの旅』354頁
  - 12) 濱本房子編集・発行『憂曇華』(1935)
  - 13) 徳島県立図書館編集・発行『モラエス案内』(1955)(1995年に徳島県立図書館より増補・再版されている)
  - 14) 徳島県立文学書道館資料番号 wm-ph004
  - 15) 『日本人モラエス』289頁に明治天皇の御尊影を「机上に奉じて、朝夕禮拜してゐた」とある。
  - 16) 『モラエスの旅』330頁
  - 17) 『おヨネとコハル』100頁
  - 18) 『おヨネとコハル』120頁
  - 19) 『モラエスの旅』337頁
  - 20) 『モラエスの旅』342頁
  - 21) 『日本人モラエス』230頁
  - 22) 『モラエスの旅』242-244頁
  - 23) ポルトガル大使館 HP (<http://embaixadadeportugal.jp/pt/bilaterais/diplomas-portugueses-no-japao/>)
  - 24) 1935年、モラエスの七回忌を前に新聞社2社がそれぞれモラエスの関係者を集めて座談会を開き、それを紙上に掲載した。徳島毎日新聞主催による『モラエス翁を偲ぶ座談會』と徳島日日新報主催しによる『モラエスさんを懐かしむ座談會』は、その記事の切り抜きがそれぞれ徳島県立図書館に保存されている。後者については『新聞集成昭和編年史(10年版)』(明治大正昭和新聞研究会、新聞資料出版発行1967)にも掲載されているが、文字のみで写真はない。
  - 25) 家系の系譜サイト Geneall.net に依る。
  - 26) 『モラエスの旅』344頁
  - 27) 『モラエスの旅』323頁
  - 28) 徳島新聞社. 『別冊 徳島県歴史人物鑑』(1994)
  - 29) 『日本人モラエス』229頁

<付>

本稿の最後に“CIVILIZAÇÃO”の記事の原文を紹介しておく。

記事本文

**O túmulo de Wenceslau de Moraes**

*Civilização* tem o prazer de dar a conhecer aos seus leitores algumas originalíssimas fotografias, especialmente cedidas ao nosso magazine, e que se referem ao grande escritor Wenceslau de Moraes, que há longos anos habitava o Japão, inteiramente convertido aos costumes e tradições nipônicas.

As nossas fotografias mostram bem o aprêço e estima que Wenceslau de Moraes gozava no Império de Sol Nascente, e quanto foi sentida a sua morte pelos seus amigos e vizinhos do bairro que habitava em Tokushima, onde se tornára muito popular.

As cinzas do grande português, que foi encontrado morto em sua casa, em 1 de Julho do ano findo, repousam como mostra uma das nossas fotografias, junto das de seu grande amigo Ko-Haru, no cemitério de Tokushima. Numa das pedras tumulares está gravado, em caracteres <<katakana>> e verticalmente, o nome do ilustre português, que foi na nossa literatura o que Pierre Loti foi na francesa.

写真の説明

p113

O túmulo de Ko-Haru, no cemitério de Tokushima, junto de cujas cinzas foram depositadas as do grande escritor português Wenceslau de Moraes

p114

Em cima e à esquerda : dois aspectos da casa onde Wenceslau de Moraes habitou durante anos, no Japão. Em baixo: altar onde foi celebrado o serviço fúnebre budista por alma do ilustre português, em Tokushima, no dia 3 de Julho de 1929; ao centro, coberta pela bandeira portuguesa, está a urna que contém as cinzas do morto ilustre. E' curioso notar que perante os nossos costumes esta foto nada tem de fúnebre.

p115

Em cima e à direita: outros dois aspectos da casa onde Wenceslau de Moraes levou uma vida de perfeito japonês, todo entregue às suas preciosidades antigas e aos seus livros. Em baixo: assistência à cerimónia budista, sufragando a alma do autor das <<Cartas do Japão>>; entre a assistência estão alguns dos maiores amigos do morto, entidades diplomáticas e consulares portuguesas, autoridades civis e militares da Tokushima